

事業活動を通じたCSRへの取り組み

日本ユニシスグループが事業活動を通じて実践する、「ITが人と社会にできること」。私たちは、時代の流れに即した先進技術を提供していくとともに、安定したサービスの持続的提供により、お客さまからの確かな信頼を得ることを目指しています。そしてその先に見えるのは、より豊かで安心できる暮らし。ここでは、「先進性」と「信頼性」の観点から、私たちの取り組みを紹介します。

先進性事例

1

ユビキタスID技術を使った、安全で安心な食品売り場づくり

株式会社京急ストア様

近年、企業の不祥事による食品事故の頻発等を受け、食品の安全性に対する消費者意識が高まっています。こうした中、ユビキタスID技術*を使って食品の生産・加工・流通・販売のプロセスを管理し、履歴を表示する、トレーサビリティシステムの開発が注目されています。2005年2月に、農林水産省の開発事業として、T-Engineフォーラム(代表:坂村健東京大学教授)・日本ユニシスを中心とした産官学連携の実証実験が京急ストア様店舗で実施され、青果物や加工食品の商品情報を、専用端末等で確認できるシステムが開発されました。このシステムでは、2次元バーコードシールを用いて生産履歴や流通情報を携帯電話画面に表示できるなど、あらゆる角度から利用者にとっての“使いやすさ”が追求されています。

日本ユニシスでは、本実験を通じて得られたノウハウをもとに、これからも食品トレーサビリティシステムの普及に向けた取り組みを推進していきます。



1: 食品トレーサビリティシステムの利用イメージ
2: 商品情報の表示画面
3: バーコードシール

*ユビキタスID技術: 「モノ」の情報を自動認識する基盤技術

先進性事例

2

福祉用具の流通履歴をICタグで管理

株式会社ハートウェル様

福祉用具レンタルのハートウェル様、物流サービスのセンコー様、日本ユニシスの3社は、福祉用具のレンタル流通において、ICタグ*技術を活用した運営・管理システム「One's Heart」を共同開発し、2005年3月より、ハートウェル様での実用化を開始しました。

本システムは、レンタル福祉用具や、出荷ゲートを通過するカゴ型台車にICタグを貼付することにより、利用者と店舗・メンテナンスセンターを結ぶ流通全体にわたり、リアルタイムに流通・履歴情報を管理することができます。また、検品、流通の効率化で約30%の在庫圧縮を実現し、廃棄物処理基準遵守にも貢献しています。

こうした取り組みにより、利用者やケアマネージャ(介護支援専門員)へのより高品質なサービス提供に役立っています。

*ICタグ: 記憶装置と無線通信の機能を持つタグ



先進性事例

3

GPS携帯電話を利用してサービス要員の位置情報と作業状況を管理

ユニアデックス株式会社

日本ユニシスグループ会社であるユニアデックスは、GPS*機能付携帯電話によるサービス支援システムを開発しました。このシステムでは、管理センターのパソコン上に、サービス要員の位置情報と作業状況をリアルタイムに表示させることで、現場からの要請に応じた迅速な要員派遣や作業指示の効率化を実現します。また、作業の終了と同時に携帯電話から作業内容が自動消去されるほか、万一の電話機紛失時には、センターからの遠隔操作で強制的にデータを消去できるなど、万全のセキュリティ機能を搭載しています。

2004年10月の新潟県中越地震、2005年3月の福岡県西方沖地震時には、ユニアデックスの要員の安否確認にこのシステムが使用されました。今後の適用領域としては、災害時対応のほか、介護サービスなど公共・福祉関連を含めた幅広い分野での活用が期待されます。(本ソリューションは「MCPC award* 2005」でモバイルテクノロジー賞を受賞しました。)

【サービス支援システムイメージ図】



*GPS:カーナビゲーションなどに使われている全地球無線測位システム
*MCPC award:MCPC(モバイルコンピューティング推進コンソーシアム)が、モバイル機器を利用した企業の成功事例を表彰する賞

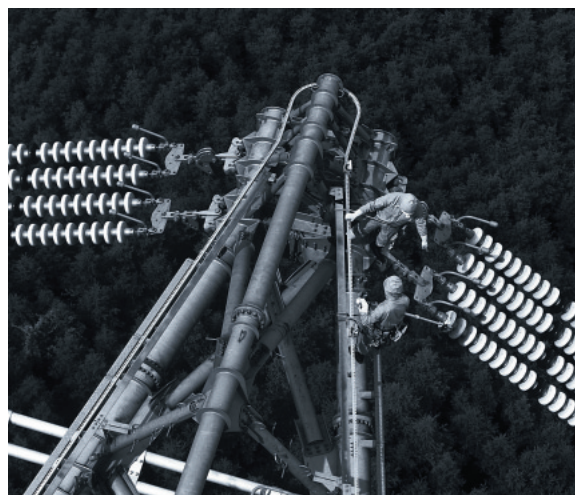
信頼性事例

1

エネルギー安定供給を支える情報システム基盤

東京電力株式会社 様

日本最大の電力会社である東京電力様に対し、日本ユニシスは、基幹業務処理にメインフレームを導入いただいて以来、40年以上にわたり情報システムの構築・運用をサポートしています。発電・送電・配電などの設備系分野やオフィス系業務など広範囲にわたる電力会社業務において、日本ユニシスは設備管理システムや経理システムをはじめとしたさまざまな情報システムを通じて、業務の効率性、生産性向上に貢献しています。



送電鉄塔設備の保守点検作業

社会のライフラインである「エネルギーの安定供給」を、日本ユニシスの情報システム基盤が見えないところで日々支えています。

東京電力
システム企画部部長代理
内田 康夫 氏

日本ユニシスは東京電力の長年にわたるITパートナーとして、東京電力の業務・情報システムを知り尽くしており、それが今日の当社における日本ユニシスへの「信頼感」につながっています。電気事業の基盤をなす情報システムは「安定稼働」が何よりも重要であり、今後も日本ユニシスの豊富な経験・実績に裏打ちされた、質の高い提案力・技術力に期待しています。



信頼性事例

2

ITを通じて「安全で快適な空の旅」に貢献

日本を代表する航空会社である全日本空輸(ANA)様では、1978年以來、日本ユニシスの情報システムを導入していただいています。具体的には、航空座席の予約・発券・チェックイン等を行う予約管理システムや国内旅行の総合予約販売システム、航空貨物の予約・運送等の管理システムなどを日本ユニシスが構築しており、エアライン事業に関するさまざまなサービスの提供および業務の運用をIT面からお手伝いしています。

新規空港の開港や2009年度以降に予定される羽田空港の国際化など、今後の航空マーケットを取り巻く環境が大きく変化していくことが予想されるなか、日本ユニシスは引き続き、ANA様が提供する「安全で快適な空の旅」に貢献し続けていきます。



ANA「スマートeチェックインサービス」

全日本空輸株式会社 様

全日本空輸(ANA)
IT推進室長
佐藤 透氏

日本ユニシスは、安定性の高いメインフレームの提供のみならず、「システムインテグレーター」としても当社をサポートしていただいております。ANAの業務に深く精通したパフォーマンスに満足しています。これからも、従来のやり方にとられない新たな関係を構築しながら、さらに強いパートナーシップを深めていきたいと思っています。



信頼性事例

3

大型汎用コンピュータをベースに全国規模の金融システム基盤を構築

農林中央金庫様は、農林漁業組合の中央金融機関として、これらの協同組織を対象とした信用事業(金融事業)を展開しています。日本ユニシスは、1974年、同金庫に大型汎用コンピュータを導入し、当時としては先駆的な勘定系業務の多科目連動処理のオンライン・システムを稼働させ、これにより、営業店業務の大幅な効率化・合理化を実現しました。以来、現在に至るまで、勘定系システムや証券系システムなど、基幹系業務システムの構築・運用を総合的に支援させていただいています。

また、2004年には更なる業務処理性能の向上、コスト削減等を目的に、最高性能のメインフレームコンピュータを導入するなど、今後も金融環境の変化への新たなシステム化対応を支え続けていきます。



農林中央金庫 本店受付(有楽町)

農林中央金庫 様

農林中央金庫 システム企画部部長
(2005年7月1日付 農中情報システム株式会社 常務取締役)
飯田 晴彦氏

農林中央金庫の情報システムは全国の農協組織に関連する公的なシステムです。日本ユニシスが構築・サポートして下さっている基幹系システムは、長年にわたって使い続けられる汎用性の高いもので、それが農林中央金庫の経営に有効に作用しています。日本ユニシスは色々な局面において、常に冷静に、全社を挙げて我々のシステムをバックアップし続けてくれており、また、それを支える技術的バックボーンがしっかりしている点に信頼を置いています。



ユーザー会から見た 日本ユニシスの社会的責任

ユニシス研究会会長
(株式会社ニチレイ代表取締役社長) 浦野 光人氏



自然体のCSR

CSRは、特に新しい発想というわけではありません。簡単に言ってしまうと、経営そのものを今の時代の視点で整理したもの、と言えるでしょう。ただ、難しいことは何もないとはいえ、色々とCSRとして拳がってくるものについて真剣に企業は取り組んでいたかという、これは別問題です。今の時代に合わせて「企業とは何なのか」ということを見つめ直す良い機会に、すべての会社になっているんじゃないかと思います。

私が考えるCSRの根幹は2つあります。ひとつは、常に「企業というものが社会にとってどういう存在なのか」という視点でCSRを考えること。もうひとつは、顧客価値創造に向けて、従業員が沸き立つというか、働きがいや生きがいを感じられることです。すべてはこの2つがうまく回るために、コンプライアンスも、ガバナンスも、社会貢献も、地球環境に対する配慮もある、というふうに私は思います。まず、いま私たち企業経営者は本当に顧客価値を創造しているだろうか、というところを一番反省するべきですね。

コンプライアンスは、要するに「ルールを守ってやっていきましょう」ということです。地球全体で共通のルールもあれば、ある国家だけに通用するルールもあるでしょう。ガバナンスでは、外部の評価をうまく活用していくことだと思います。一番身近なのは従業員、それから顧客・ビジネスパートナー・株主・社会等々ですね。セルフチェックだけに固まらなくて、外部チェックをうまく活用していくことです。

社会貢献では、まず税金を納めること。もちろんお金をかけなくてもできる社会貢献はあります。雇用の創出や地域行事への参加、清掃活動などですね。そこで重要なのは、その会社ができる身の丈に合った社会貢献を実行していくことです。同様に、地球環境についても、その企業らしさをどう生み出していくか。それは事業によって変わってくるものです。京都議定書以降、企業活動だけが地球環境を汚染しているのではなく、生活者一人ひとりの生活のパターンが地球環境に大きな影響を及ぼしていると考えられています

から、従業員一人ひとりが、その立場で企業活動のことを再考することが、いま一番求められているでしょう。

私がユーザー会の会長という立場から日本ユニシスに期待することは、今まで以上に顧客企業と一心同体になり、ミッション、ビジョンから理解しようと努力してほしいということです。「クールヘッドとウォームハート」、この2つを提供していく企業になっていただきたい。その好例として「業種を超えたユーザー同士の業務上の出会い」をセットできる日本ユニシスならびにユーザー会の活動があると思います。

結局、CSRというのは、そこで働く人たちが「何故その企業で働いているのか?」ということとイコールなのです。会社に入ってやりたいと思っていたことを、「やるべきこと」「できること」という円に重ね合わせてみると、自然とCSRになるのではないかと、そんなふうに私は思っています。

ユニシス研究会とは

昭和28年、日本ユニシス、日本ユニパックの前身吉沢会計機のパンチカードシステムのユーザー30社が事務機械化の発展のための情報交換を目的として発足したのが、ユーザー会の起源です。日本ユニシスグループのシステムやサービスをベースにIT活用に向け、研究活動を積極的に行ないつつ会員相互の情報交換・交流を図っています。前身に遡れば日本で一番長い歴史を持ち、現在の会員数は約700社。

主な活動

1. 研究活動

企業の経営層からミドルマネジメント層、リーダー・担当クラスまでの幅広い層向けに経営課題やビジネス課題、IT活用の課題などについてのホットなテーマを取り上げ、5～6名での固定メンバーで約10ヶ月の研究活動を実施。研究活動の成果（報告書）はユニシス研究会の知財ポータルに登録され、会員が検索・活用できます。

2. 論文募集活動

会員企業における新ビジネス開発、IT活用、業務改善などの事例や提言について論文を募集。研究活動同様、入選論文は知財ポータルにて会員に公開されています。

3. 全国カンファレンス

毎年春に開催され、全国の会員が参加し研究活動の成果発表や優秀論文の発表などが行なわれます。また優秀な活動に対して贈られるエグザクティブ賞表彰式や会員同士の情報交換会も行なわれています。

4. 全国フォーラム

毎年秋に支部持ち回りで開催され、全国から会員が参加し記念講演の他に開催地に関連するテーマの講演などが行なわれています。

5. 支部活動

全国9支部主催で、研究活動（グループ研究）やフォーラム、セミナー、企業見学会などを開催しています。